

## 野上記念法政大学能楽研究所

## I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2019年度大学評価結果総評】(参考)

能楽研究所の研究・教育活動は、研究集会やシンポジウムの開催、特別展示、能楽資料デジタルアーカイブの拡充、プロジェクトごとの研究会など活発な活動が実施されており、高く評価できる。対外的な研究成果の発表に関しても、『能楽研究』や能楽資料叢書の刊行、2名の専任所員による研究成果など、評価できる。立命館大学アート・リサーチセンター、コーネル大学、京都産業大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校などの研究者と JPARC を組織し、活動を始めたことは優れた取り組みであり、その成果が期待される。

能楽研究所は、1952年に能楽研究の発展と能楽の振興を目指して設立され、3年後には創設70周年を迎える。学際的・国際的な能楽研究の拠点としての能楽研究所の存在を、国内外に広めることが望まれる。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

共同利用・共同研究拠点の第二期認定を受け、気持ちをあらたに、学際的・国際的な能楽研究拠点としての活動を進めたつもりである。とはいえ、小所帯の研究所であり、我々の力だけでは、早稲田大学の演劇博物館や立命館大学アートリサーチセンターと同レベルの活動をおこなうのはそもそも無理であることを、再認定前のヒアリングや機能強化支援の不採択等を通じて再認識している。そのため、2019年度は、豊富な能楽資料をよりいっそう使い易い形で公開しつつ、学外の研究者と広く手を組んで研究活動を活性化させることをめざすこととした。2019年度は数多くの学外共同研究を募集し、わずかながら研究費も付けて拠点としての活動を推進した。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

野上記念法政大学能楽研究所は、2019年度の評価結果において高い評価を得ておりながら、研究所の規模からくる限界も自ら自覚し、何が可能で何が不可能かを見定めようとしている姿勢は、評価できる。共同利用・共同研究拠点の第二期認定を受け、学外共同研究という方向により、研究員の少なさからくる限界を超えようとしておられるが、研究所自体の魅力なしには、学外共同研究は実現しない。これまでの実績から、貴研究所との共同研究は学外組織にも魅力的なものとして認識されているものと思われる。今後の研究の推進に期待したい。

他方で、評価結果では「学際的・国際的な能楽研究の拠点としての」存在についての広報活動の充実が求められているが、能楽資料の公開のみでなく、研究活動についての一層の広報活動の強化についても期待されるであろう。

## II 自己点検・評価

## 1 研究活動

## 【2020年5月時点における点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

## ①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

## ・貴重資料データベースの拡充に向けた作業

○伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ

2019年11月 動作の不具合修正

○能楽資料デジタルアーカイブ

2020年2月 「名女川本狂言台本・伝書」「名女川家番組留帳」解題作成とアップ

2020年3月 「十番綴喜多流型付」撮影

## ・セミナー・シンポジウムの開催

○シンポジウム「家元のアーカイブ」(能楽学会と共催)

日時:2019年10月19日(土)14:00~17:30

会場:法政大学 ポアソナーダタワー26階 スカイホール

## ・研究集会「近世初期出版文化の中の謡本」

日時:2020年3月7日(土)13:30~17:00

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

会場：法政大学 ボアソナードタワー26階 スカイホール

→新型コロナウイルスの流行により中止。

- ・セミナー「千変万化 狂言《附子》—過去・現在・未来—」（手話狂言実演）

日時：2020年3月14日（土）13：30～17：00

会場：法政大学 ボアソナードタワー26階 スカイホール

→新型コロナウイルスの流行により中止。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

拠点サイト <http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/uncategorized/2020/3731/>

能楽研究所サイト <http://nohken.ws.hosei.ac.jp/archives/index.html>

## ②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

◎研究所の刊行物 『能楽研究』44号 2020年3月25日刊行 全300頁

◎学会発表等

日本文学や演劇、芸能史研究等の学会では、パネル発表などを行う場合以外、共同研究の発表をおこなうことは稀である。以下には、研究所としての成果を主な担当者個人が示した発表と、研究所としての活動の一環として個人がおこなった発表を掲げる。

- ・山中玲子「いくさと能」（招待講演）2019年9月13日 Gettysburg Symposium（ピッツバーグ大学）
- ・宮本圭造「金春家文書の再検討」 2019年5月10日 芸能史研究会
- ・宮本圭造「金春家文書の形成と流転」 2019年10月19日 能楽学会

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

## ③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。研究所がこれまでに発行した刊行物は多数に及ぶため、その引用数を全て把握することは困難であるが、学会誌『芸能史研究会』227号（2019年）所収の論文に本研究刊『近代日本と能楽』（2017年）が、日本芸術文化振興会『能狂言絵コレクション』（2019年）に本研究所紀要『能楽研究』37号（2013年）が引用されているのが目に入った。

本研究所専任所員の研究成果については以下の通り。

書籍に関しては、著名な能楽研究者の退官記念論集『中世に架ける橋』（森話社。2020年）所収の論文に専任所員1名の論文1本、『日本の舞台芸術における身体』（晃洋書房。2019年）所収の論文に同人の論文3本が引用されているほか、先の『中世に架ける橋』には、能楽研究所のデジタルアーカイブの取り組みについても詳しい言及がなされている。また、日本美術史研究の泰斗がまとめた大著『日本の仮面』下巻（中央公論美術出版。2019年）に専任所員1名の論文12本、『万葉集を読む』（青土社。2019年）に同人の論文1本、『古典文学の常識を疑うII』（勉誠出版。2019年）に同人の論文2本が引用されている。

学会誌では、中世文学会の『中世文学』64号（2019年）所収の論文に専任所員1名の論文1本、芸能史研究会の『芸能史研究』226号（2019年）、『藝能史研究』229号（2020年）に専任所員1名の論文がそれぞれ1本、2本引用されている。

そのほか、『三重県史』通史編第2巻中世（三重県。2020年）において専任所員1名が論文で提示した新説が採用されるなど、関連学界において高く評価されていることが窺える。

なお、能楽研究所が公開している能楽資料デジタルアーカイブ、金春家旧伝文書デジタルアーカイブ、伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブへのアクセス数については、新型コロナウイルスの流行による学内立ち入り制限のため、正確なアクセス数を把握することが出来なかった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

## ④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用・共同研究拠点として、学内外の構成員から成る運営委員会の細かなチェックを受けている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p><b>⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況</b></p> <p>※2019 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2019 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。</p> <p>2019 年度中に応募した科研費等外部資金</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・科学研究費補助金基盤（B）「大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究」（研究代表者：宮本圭造）</li> <li>・科学研究費補助金基盤（A）「文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技艺伝承の総合的研究」（研究代表者：山中玲子）</li> </ul> <p>2018 年度中に採択を受けた科研費等外部資金</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・科学研究費補助金基盤（B）「能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究」（研究代表者：山中玲子、2019 年度直接経費 390 万円）</li> </ul>
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

## 【この基準の大学評価】

能楽研究所は、データベース拡充、シンポジウムの開催などの活発な研究活動、豊富な研究実績、海外での招待講演に招かれるなどの学外評価、大型の科学研究費補助金の獲得など、優れた研究所として、研究活動全般について大いに評価できる。

それも、研究実績について、単に出版実績のみならず引用実績にまで言及しているのは特筆に値する。

## III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	研究所を拠点とする多様なスタイルの共同研究をみずからも推進し、かつサポートする。貴重資料の整理・公開を進め、研究成果を、研究発表、論文、能楽研究叢書、能楽資料叢書等で発信していく。
	達成指標	能楽研究叢書または能楽資料叢書を 1 冊以上刊行。研究所主体または公募による共同研究を 10 件以上実施する。
1	執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	共同研究は 12 件応募があり 11 件を採択して活動している。 能楽資料叢書の年度末刊行に向け、印刷会社と連絡を取り合い作業を進めていたが、ベテラン編集者の急逝や熟練技術者の退職、システムの入替え等が重なって例年のように無理がきかず、年度末に間に合わせるができなかった。
	改善策	能楽研究所の紀要や出版物は年度末ギリギリの綱渡りで刊行することが多く、「我々の中でほしいこのペースでなんとか間に合う」という基準が出来てしまっていたが、それは印刷

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			会社の多大な努力と犠牲の上に成り立っていたことが判ったので、今後は、原稿の締め切り厳守を徹底し、刊行期日も早めに設定するよう最大限の努力をする。
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。	
	年度目標	主催するセミナーまたはシンポジウムで研究成果還元をはかるほか、国立能楽堂、アーツカウンシル東京をはじめとした各地の博物館や演能団体等に協力し、資料展示や講演、外国人を含めた新しい能楽の観客層拡大に向けての講座・解説等を行う。	
	達成指標	セミナーまたはシンポジウムを1回以上開催。学外機関での催しへの学術的協力、能楽界と協力しての観客層拡大等を、3回以上実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A	
	理由	3月に、研究集会「近世初期出版文化の中の謡本」、セミナー「千変万化 狂言《附子》一過去・現在・未来」を企画し準備を進めていたが、それぞれ延期・中止となった。学外機関への学術的協力・観客層拡大の協力としては、NHKの能楽放映に際しての副音声解説、アーツカウンシル東京主催の外国人向け能楽公演のパンフレット及び解説監修、能楽公演の字幕解説執筆、オリンピック記念能のパンフレット解説等がある。	
	改善策	セミナーの中止と研究集会の延期は外的要因によるもので、いたしかたなかったと思っており、特に改善策はない。	
<b>【重点目標】</b>			
研究活動 共同利用・共同研究拠点にふさわしい多様な共同研究を進めていく。 従来の研究資金支給型の共同研究に加え、施設や資料を提供するタイプの共同研究も公募する。理工系・社会学系の研究者たちに共同研究を呼びかける。			
<b>【年度目標達成状況総括】</b>			
今年度は、研究資金をほとんど提供しない（0～5000円）研究グループ4件、10万～30万円の研究資金を提供した研究グループ7件、が共同研究活動を行った。従来から続く仏教学と能楽研究の学際的研究の成果は、今年度末、別の研究プロジェクトとの協同でウェブサイトから発信できるところまできている。研究所の新蔵資料の調査・整理を基盤にした共同研究や、実演者も含めての研究会を重ねて演出資料を読み解いている共同研究もあり、成果は順次、研究所の紀要である『能楽研究』にも掲載していく。今年度は狂言の新出資料の解題と翻刻が載る。理工系、社会学系の研究者たちが呼掛に応えてくれて始まった共同研究は、未だ端緒についたばかりで、今年度は目立った成果は出ていないが、まずは人が繋がっていくことが重要と考えている。			

**【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】**

能楽研究所における2019年度の年度目標に関して、「研究活動」については、共同研究の件数には達成指標を上回ったが、能楽資料叢書の年度内刊行は間に合わなかった。とはいえ、年度目標が達成できなかった理由を明確に把握されており、また改善策が大変具体的であるため、今後の改善が大いに期待できる。

2019年度の重点目標は、「理工系・社会学系の研究者たちに共同研究を呼びかける」であるが、情報工学修士の能役者との共同研究を開始し、科研費を採択され、また経営情報学、人材育成などを専門とする経営学者のグループと、能楽における情報発信、観客の満足度に関する共同研究を開始しているなど目標を達成している。今後さらなる成果を期待したい。

**IV 2020年度中期目標・年度目標**

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	昨年度に引き続き、多様な分野の研究者との共同研究を進め、成果の確実な発信に努める。また、共同研究が若手研究者の育成につながるよう努める。
	達成指標	・共同研究の成果を一つ以上『能楽研究』に掲載。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		・拠点としての研究成果を一冊以上刊行。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
	年度目標	能楽に関する良質なコンテンツを、SNSや独自のウェブサイト等を通して公開できるよう、能楽界との強力体制を構築していく。
	達成指標	・能楽に関する情報発信のためのサイトをあらたに立ち上げる。
<p><b>【重点目標】</b> 共同研究を進めるとともに、その成果の確実な発信に努める。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> 本年度は人が集まっての共同研究がどの程度進められるか不明だが、すでに蓄積されている研究成果を形にして公表できるよう、対面がかなわない場合でも、オンラインでの研究会議等を重ねて成果物の刊行をめざす。</p>		

#### 【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

能楽研究所のこれまでの実績からしても、2020年度の「研究活動」の目標は適切かつ具体的であると評価できる。また、本年度は確かに、対面活動が難しいが、【重点目標】そのものも、適切かつ具体的であるように思われる。

「社会貢献・社会連携」については、「SNSや独自のウェブサイト等」を通じた公開が年度目標とされており、既存のウェブサイトより高い機能を備えた「能楽に関する情報発信のためのサイト」となる予定であり、研究成果の一層の発信が期待できる。

#### 【大学評価総評】

能楽研究所は、データベース拡充、シンポジウムの開催などの活発な研究活動、豊富な研究実績、海外での招待講演に招かれるなどの学外評価、大型の科学研究費補助金の獲得など、小世帯ながら優れた研究所として、大いに評価できる。それも、研究実績について、単に出版実績のみならず引用実績にまで言及しているのは特筆に値する。また、海外にまでまたがる研究活動は、日本文化の発信や国際交流という点でも、日本ひいては世界に貢献するものであり、本学の社会貢献の重要な部分をなしているものと評価できる。

また、理工系・社会学系の研究者たちの共同研究も、大変興味深く、研究所の発展という面からは素晴らしいことであるように思われる。

貴研究所は、「学際的・国際的な能楽研究の拠点」として、能楽資料の公開のみでなく、研究活動についての一層の広報活動の強化についても期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。